

## 横浜インターナショナルオープンデー2014

横浜オープンデータソリユー  
ション発展委員会

26年2月22日、横浜港大さん橋国際客船ターミナルC I Q プラザなどYOKOHAMA International Open Data Day 2014（以下「同イベント」）が開催された。

インターナショナル・オープンデー・デイは、2月22日に世界中で一斉に開催されるオープンデータの普及イベント。世界各国で約200の都市がエントリーし、日本では横浜のほか、札幌、



写真1 横浜会場の参加者

東京、千葉、川崎、名古屋、京都、鯖江、会津若松、青森など33都市で開催された。

同イベントの主催は、横浜オープンデータソリユーション発展委員会と横浜インターナショナルオープンデー実行委員会。会場となった横浜港大さん橋国際客船ターミナルの指定管理者である相鉄企業株式会社が共催した。ちなみに後援・協力団体は各種企業やNPO、大学、行政など21団体にのぼっている。

同イベントのテーマは、『横浜開港の地「大さん橋」から世界最先端のIT国家・日本のハブとなる「データポート横浜」を世界に発信しよう！』。横浜らしいフロンティア・スピリットを持つ人たちから集まり、交流し、協力することで、社会に役立つ新しい何かを生み出すこと、そして世界最先端のIT国家を目指す日本のハブとなり、オープンデータの成果を世界中に発信するという趣旨である。

この趣旨に従って、イベント当日は、主に以下の5つのプログラムが展開された。

## オープンデーで考える横浜・神奈川のおもてなしの発展戦略 2020東京五輪に向けてのアイデアソン

市民や企業、横浜市を始めとする神奈川県内の市町村の自治体職員など約60名の参加者が一体となり、2020東京オリンピックに向け、横浜・神奈川の未来のまちづくりについて話し合い、提案したアイデアソン。第1部では、主に旧東海道エリアを中心に横浜市内でオープンデータを活用した観光・まちづくりに取り組む市民団体や企業、行政がそれぞれの取組について報告。その後、開催された第2部では、参加者が6つのグループに分かれてデスカッション



写真2 アイデアソンでの発表の様子

をし、それぞれユニークな視点から横浜・神奈川の「おもてなし力」を高めるための提案をした。なおアイデアソンの最後に主催者から、2020年までの7年間、神奈川県内の各地でオリンピックに向けた観光・まちづくりのアイデアマラソンを続けようという呼びかけがなされた。

## YOKOHAMA International Open Data Day 総合ハッカソン

事前に金沢区や青葉区などで行われたアイデアソンで出て来たアイデアを紹介したうえで、子育て・防災・観光分野におけるオープンデータを活用したアプリケーションを開発したハッカソン。当日参加した企業のエンジニア、プログラマー、市民ハッカーなど約30名が8グループに分かれ、集中して協働作業を行い、短時間でそれぞれ楽しく、ユニークなアプリを開発した。各チームからの発表後、審査員による厳正な審査の結果、5つのアプリが表彰された。

・最優秀賞（日本マイクロソフト株式会社）「歩いて楽しく防災訓練」：青葉区の避難所データなどを使い、防災訓練と街歩きを合わせたアプリ

・優秀賞（大さん橋、マリント



写真3 ハッカソンの様子

ワー)「避難所状況報告アプリ Sherepo」…避難所の状況をスマートフォンで報告し(災対本部+twitter)、マップで表示  
・佳作(横浜市政策局)「外国人観光客おもてなしアプリ」…横浜の観光関連情報を各国語で配信するアプリ  
・グリー賞(グリー株式会社)「Green Vision」…アップロードした街の風景画像を自動解析し、「緑視率」をマップ上にプロット  
・かなざわ育なびnet賞(横浜市金沢区)「絵本検索」…ママさんお薦めの絵本を知りたい!公立図書館の絵本蔵書データとのマップシェアアップも

### ウィキペディアタウンワークショップ

歴史や文化など、地域魅力資源についての取材を通じて、記事や写真をウィキペディア(インターネット上で閲覧できる全世界的な無料百科事典)に投稿するワークショップ。横浜能楽堂、赤レンガ倉庫、大佛次郎記念館、横浜美術館を対象に4つの班に分かれて、写真、テキスト、リンク、情報源などのどのような情報を、現在あるウィキペディアにある各施設のページに付け足すとより充実するかなどについて、活発に議論。その後、各班がそれぞれの施設を訪問、施設のスタッフから施設の由来や活動内容などの説明を受けた後、施設内にスペースを借りてその場でウィキペディアの編纂を行った。

### AR歴史街歩き

小学生から中高年まで幅広い年齢層の40名が参加。スマートフォンやタブレット端末に拡張現実(AR)技術を使ったアプリを登録、横浜マリントワーから大さん橋まで、浮世絵、絵葉書や昔の風景写真と現在を見比べつつ、散策した。また、大さん橋会場の床面には臨海部の古地図を5m×5mに拡大した「ガリ

バーマップ」(株式会社野毛印刷社提供)が設置されており、その上を参加者がガリバー気分で歩き回ったり、イーゼルに載せられた現在の写真にスマートフォンをかざして過去の絵葉書や写真、動画を見るなど、平面の地図をそれぞれが立体的に体感した。

### ユースワークショップ 社会課題を解決するためのアイデア創出について〜ゲーム企画の視点からのヒント〜

市内の高校、専門学校生がアプリ開発など情報技術に対するお互いに日頃の活動の成果を共有し合い、さらに若者の感性で社会課題解決に向けたアイデアについて考えるワークショップ。ソーシャルゲーム等を開発・展開するグリー株式会社との協力によって実現した。

横浜サイエンスフロンティア高校、情報科学専門学校の生徒からアプリ開発などそれぞれの学校の取組についての発表の後、グリー株式会社の企画開発担当の社員からゲーム企画の視点から考える新しいアイデアの創り方に関する講演を行った。その後、聖光学院を含めた3校の生徒約30名が、個々のアイデアを組み合わせることで、新しいアイデアを考え

るワークショップを行った。3校の生徒が混ざり合ったグループディスカッションでは、それぞれの持つ知識と考えを積極的に出し合い活発な議論が行われた。

このように多彩な企画が行われ、多くの成果が得られた同イベントであったが180名と国内では最多の参加者を得て、世界的にも最大級のインターナショナルオープンデータイベントとなった。これは、何よりも横浜において市民と行政が共に手を携えてこれまでもオープンデータの取組を着実に進めて来た成果だと考えたい。



写真4 ユースワークショップの様子